日本橋オペラ 2021 歌劇「お菊さん」日本初演

音楽の友2021年7月号

オペラ／声楽

日本橋オペラ 2021 メサジェ《お菊さん》

5月30日・日本橋劇場●佐々木修（指揮&日本語歌詞作成）、居福健太郎（p）、清水由紀（打楽器）、高木 信（tp）、山井綱雄（金春流能楽師）、村岡聖美（金春流能楽師）、福田祥子（お菊さん／総合演出）、池本和憲（ピエール）、上田誠司（イヴ）、飯沼友規（勘五郎）、田辺いづみ（お梅）、大倉修平（サトウ）、高橋千夏（お雪）、菊池未来（苺）、根岸一郎（甲板員&シャルル）、加護友也（ラウル）、吉永研二（ルネ）、小川陽久（ジャック）、町村 彰（丹波）、櫻井 航（一作）、吉田 覚（京都）、小川嘉世（水仙）、高橋みのり（茉莉花）、小宅慶子（桔梗）、宇津木明香音（撫子）、渡谷真衣（椿）

長崎が舞台のメサジェの歌劇《お菊さん》（1893、パリ）が遂に日本初演の運びに（同一キャストの二日目）。本作は上演の機に恵まれず、2011年コミック座の蘇演構想も頓挫したが、今回は居福健太郎の繊細なピアノと指揮者兼日本語歌詞作成の佐々木修の丁寧な差配（訳詞が聴きとりやすい）も寄与し、皆の熱意が実ったものと思う。特筆すべきは金春流能楽師の山井綱雄の起用。厳かな足運びが音楽の静謐さを強め、第3幕の〈踊り〉では猩々（しょうじょう）のイメージで華やかに舞い踊り（曲中に《さくらさくら》の音型が登場）、能面の立ち姿も、本物の愛は心に隠す芸者の生きかたと重なって余情を醸し出した。歌手も力演。お菊さん役で総合演出も担当した福田祥子は、第3幕の名アリアから存在感を強め、池本和憲（ピエール：スタイリッシュな演唱ぶりが光る）との終幕の二重唱をドラマの頂点に。上田誠司（イヴ）の明るい声音と面差し、田辺いづみ（お梅）と飯沼友規（周旋屋の勘五郎）の歌の安定感と愛嬌たっぷりの演技、高橋千夏（お雪）の控えめな佇まいも好印象。

●岸 純信

モーストリー・クラシック 2021 年 8 月号

5月30日　日本橋劇場

日本橋オペラ メサジェ：歌劇「お菊さん」

オペラ

A・メサジェのオペラ「お菊さん」（1893）が日本初演された。主催した日本橋オペラ研究会（会長・福田祥子）は楽譜の修正から着手し、関係人物や長崎の史跡等の研究を重ね、その成果を適切に発揮しての好舞台。

佐々木修の指揮で歌手のアンサンブルはよく訓練され、オペレッタ調の軽快な演奏で楽しませた。ピアノ（居福（いふく）健太郎）による日本語上演、字幕つき。

台本（G・アルトマン&A・アレクサンドル）は、P・ロティの小説の筋立てをほぼ生かしている。海軍中尉ピエール（池本和憲）と水夫イヴ（上田誠司）が短い長崎滞在で体験した女性関係や風物詩を描く内容だ。

ピエールは芸者・お菊さん（福田）を現地妻にするが、イヴとお菊さんの関係を疑ったまま帰国する。商人たちの活気や結婚仲介人（飯沼友規）の如才なさ、お菊さんの義母（田辺いづみ）や義妹（高橋千夏）の興味しんしんの態度などで庶民感覚が表現される一方、踊りの場面では能楽師（山井綱雄）の舞を入れることで風格が出た。総合演出は福田。

関根礼子◎音楽評論家

ご招待ありがとうございました。あのオペラが日本で見られるとは、感激でした。
皆さん、たったの２回の公演のためとても周到な準備をされて、とても楽しい舞台でした。なかでもプリマの福田さんの声の美しさや可憐な演技は素晴らしかったですね。能を取り入れたのも、興味深い演出でした。カタログを拝見すると、本当に細かいところまで調べられて、台本や楽譜を当時の音楽史ときちんと照合しながら跡付けていられる点、とても勉強になりました。メッサジェとプッチーニの関係など、初めて知りました。
2018 年にはマスカーニの『イリス』も上演されたのですね。私の本はパリの舞台だけを取り上げたため、『イリス』についてあまり調べなかったのですが、ミラノのリコルディ社で少しだけ舞台のためのスケッチを見ることができました。再演されることがあったら、ぜひ拝見したく思います。
永い間上演されていないプログラムを舞台にかけるのは、本当に大変なお仕事だと実感しました。重ねて感謝申し上げます。
このコロナの中、本来ならたくさんの観客に見てもらいたい舞台でしたが、それでも見ることのできた者は幸せだったと思います。
今後のご活躍をお祈りいたします。

馬渕明子（美術史家、日本ジャポニスム学会会長、前国立西洋美術館館長）

「お菊さん」という優しい響きのオペラが、いまから約１３０年も前のパリで初演されていた。その時から幾星霜が経った今年の５月、日本で初めてそのオペラ全曲が初演されたのだ。初演したのは、日本橋を本拠とする日本橋オペラ研究会。初演の場所は日本橋劇場と、「お菊さん」に相応しい団体と会場だ。じつは１年前に上演が計画されていたのだが、コロナ禍で延び、ようやく５月２９日と３０日に幕が開いた。珍しいオペラの初演とあり、オペラ好きの関心を呼んで、両日共に満員の盛況（５０パーセントの入場制限を守り、２日間の上演に）となった。

「お菊さん」の原作は、フランスの人気作家ピエール・ロティの小説。ロティは１８８５年にフランス海軍士官として長崎を訪れ、１ヶ月ほど滞在。現地の芸者と暮らした想い出を小説にまとめた。１９世紀末といえばヨーロッパで異国趣味が流行し、とくにジャポニズムが人気だった。小説もこの波に乗って大評判になっていた。「お菊さん」に興味を持ち、オペラ化を思い立ったのが、指揮者であり作曲家のアンドレ・メサジェ（１８５３～１９２９）だった。こうしてメサジェ自身の指揮により、「お菊さん」は１８９３年にパリのルネサンス座で初演された。メサジェは軽いオペレッタやミュージカルを得意としていたが、一時は忘れられた作曲家だった。しかし近年フランスでは、自国のオペラを再評価する機運が高まり、メサジェの「フォルチュニオ」「情熱的に」「可愛いミシュ」などのオペレッタやミュージカルがフランス各地で復刻上演され、日本でもそのライヴ映像が発売されるようになった。

日本橋オペラによる「お菊さん」の公演は、日本語による訳詞（日本語と英語の字幕付き）で、ピアノ伴奏による上演となった。舞台は明治時代の長崎で、ゲイシャや斡旋人、長崎の住民たちが登場するので、日本語での上演は分かりやすく親しめる。今回の上演で特筆されるのが、伝統芸能の「能」を演出に取り入れたこと。日本橋劇場の舞台には能舞台を模した松羽目がデザインされている。その舞台を生かし、オペラの舞台に能を取り入れたのだ。プロローグとエピローグ、各幕の最初には金春流能楽師山井綱雄氏による能が披露された。とくに３幕の夏祭りの場面では、本来演じられるバレエの代わりに、華やかな能が舞われた。この部分のメサジェの曲は流麗で、最後には「さくらさくら」の旋律もアレンジされており、まるで能のために作られた曲のようだった。

メサジェの曲はいかにもフランスふうに繊細で、流れるような美しい旋律が特徴だ。異国情緒にあふれたフランス・オペラとお能のコラボレーションは新鮮で、舞台に不思議な緊迫感が生まれた。

物語は、フランス海軍士官のピエールとその友人イヴと芸者のお菊さんやその友人・親戚たちとのひと夏の短い交流が幻想的に描かれる。主役のお菊さんを演じたのは、日本橋オペラの代表、福田祥子。華やかな衣裳の影で、つかの間の愛に悩む女性をはかなげに演じた。もとはドラマチックな声質を持つ福田だが、今回は柔らかい声で繊細な旋律を歌いあげた。とくに３幕の名アリア「セミの歌」は聴きものだった。男声陣ではピエール役の池本和憲やイヴ役の上田誠司、勘五郎役の飯沼友視も好演。女声ではお雪役の高橋千夏、お梅役の田辺いづみも好演だった。ピアノの居福健太郎は、２時間ほどのオペラを一人で演奏。全体を統率して指揮したのは佐々木修。出演者たちがいずれも生き生きと演奏していたのが印象に残った。「お菊さん」はこれまで長い間、上演の機会に恵まれなかった。会場で配られたプログラムにはその事情やピエール・ロティが「お菊さん」を書いた背景などが詳しく綴られている。それによると初演時は１６回上演されたあと、モンテカルロやブリュッセルで上演。１９２０年にはニューヨークで、三浦環の主演で上演されたという。しかしその後、数回上演されたものの、しばらくは忘れられた作品だった。その理由は似通った題材のプッチーニ「蝶々夫人」が人気になったのが原因の一つかもしれないという。じつはプッチーニとメサジェは１８９２年夏にイタリアのコモ湖に一緒に滞在しており、この時にメサジェが作曲していた「お菊さん」が、プッチーニの「蝶々夫人」に影響を与えたという。これらの事情もプログラムには豊富な写真と資料と共に紹介されている。また指揮者の佐々木修と主演の福田祥子は、ロティが描いたお菊さん（実在の女性で本名はお兼さん）の足跡を長崎に訪ね、彼女の生涯について調べた資料をプログラムに発表している。

日本を題材とした知られざるオペラを発掘して紹介し、全曲日本初演した日本橋オペラの「お菊さん」の舞台は、日本のオペラ史に残る、貴重な公演となった。

（オペラ評論家 石戸谷結子）